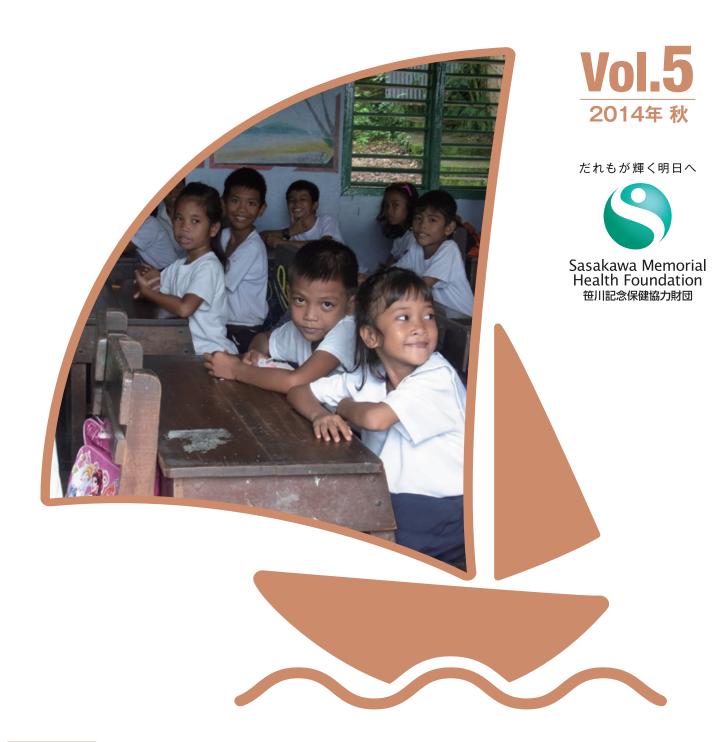
(チーム) ささへる ニュース



特集 台風被害復興進むクリオン(フィリピン)

マレーシア発「家族の絆」を取り戻そう放射線災害医療サマーセミナー2014

「日本ボートレーサー奨学金」開始/第5回世界のハンセン病セミナー開催のお知らせ 「日本財団在宅看護センター」企業家育成事業/2015年度ホスピス緩和ケア事業 研究助成募集のお知らせ FAPA石館賞/マンスリーサポーターを募集しています

台風被害復興進むクリオン

フィリピン パラワン州北部クリオン。2013年11月の超大型台風で大きな被害を受けました。 当財団の支援で、家屋や公共施設の復旧、生活の糧を失った人たちの生活再建などの復興が着々 と進んでいます。

フィリピンを襲った困難

2013 年後半、さまざまな困難がフィリピンを襲いました。9月には諸民族解放戦線の一部のグループが南部サンボアンガ市侵攻。当財団が立ち上げ準備から支援をしている全国ハンセン病回復者と支援者ネットワーク(CLAP)に全面的に協力をしてくれてきた、スールー療養所の所長も人質となり負傷。多くの死傷者と避難民を出す事態へと発展しました。10月には中部ボホール島を中心としてマグニチュード7.2の直下型大地震が発生。



クリオンはマニラの南西、パラワン州の北部に位置する



沿岸に建っていた家屋跡

続く11月には観測史上例を見ない勢力となった超大型 台風30号(現地名ヨランダ)がレイテ島やサマール島 を中心に広範囲にわたって襲い、1,600万人を超える 被災者を出しました。

被害の最も大きかったレイテ島の状況はフィリピン内外でも連日報道されましたが、その他の地域の状況が伝えられることはありませんでした。

クリオンの台風被害

台風ヨランダは、かつて世界最大のハンセン病隔離施設があったクリオン行政区でも猛威をふるい、住民の75%が被災しました。台風の通り道から外れることが多いクリオンで、ヨランダの前に台風被害が出たのは、約25年前のことです。その25年前もヨランダよりはるかに規模の小さいものでした。

台風が過ぎ去った翌朝、クリオン療養所ならびに総合病院には多くの人がやってきました。家が壊れた、漁業用ボートが壊れた、屋根が飛んだ…。自身も被災している病院職員たちが調べたクリオンの被害状況は想像を絶するものでした。天候不順のため電話もつながらず、停電と断水が続く中、雨風を防ぐ屋根も壁も失った人たちは、

避難センターに身を寄せましたが、住む場所も家財道具 も生活の糧も失い、先行きの見えない日々でした。

緊急支援を決断

病院がまず手掛けたのは、被害状況把握と支援優先順 位付けでした。

当財団は病院との協議を重ねた結果、多くの個人、団体のみなさまからのご寄付を受け、まず緊急支援として、米を始めとした食料や毛布の入った緊急支援パックを1,570家族に配布すると共に、クリオン島周辺の島での巡回医療の支援を行いました。クリオンにもNGOや政府機関から被害状況把握のために、人が派遣されてきましたが、いずれも被害状況を視察するに終わり、支援にはつながりませんでした。人々の焦燥と不満が高まる中で、フィリピン内外の団体・機関による支援活動に先駆けて行われた当財団の緊急支援は、長い復興への道のりを歩き始める気力と希望となりました。

復興の第一歩

初期の混乱が収束しつつあった、台風襲来から1カ月半後、病院と当財団は、復興に向けての協議を始めました。フィリピン政府の復興予算も視野に入れ、支援優先順位が高く、なおかつ予算確保が非常に困難だと見込まれるものとして、数多くの要請やニーズの中から病院側が挙げたのは、完全に倒壊した回復者男性寮、住民家屋、教育施設、歴史ミュージアムと100周年記念碑の修繕、生活の糧を失った人に対する生計復活支援でした。



まずは7月に漁業用のボート5艘が供与されました

協議を重ねながら現地の状況確認をし、2014年3月に復興支援を決定。これまでに35軒の家屋修繕、小学校2校と中高学校1校の修繕・建設、歴史ミュージアム修繕、100周年記念碑修復が行われ、回復者男性寮の修繕、そして中高学校1校の水施設整備も行われる予定です。家屋も教育施設も地域住民が積極的に修繕や建築に労働力を提供してくれました。また、台風により漁業に必要なボートや網、農作物や果樹、豚や鶏を失った人々が生計を立てていけるよう、ボートや網、農作物の種、家畜、雑貨販売のための自転車を提供しました。

そして今

みなさまからのご寄付を受けて行われた、クリオンにおける台風被害緊急支援・復興支援に続き、現在では小規模ながら家屋修繕やボートの供与を行う団体も出てきました。また政府による病院施設の被害支援の動きもあり、クリオンの復興も第一段階を終えました。

クリオン療養所ならびに総合病院のクナナン院長からは、クリオンが台風直後の混乱から立ち直り、復興の道をたどり始めるために、最も支援を必要としていた時期に、最も必要な支援を提供したことに対する感謝が伝えられました。今後は地方行政が中心となって計画を立て、復興をめざすことを期待するという前向きな言葉をもらい、当財団のフィリピン台風被害復興支援は、現在進行中の男性回復者寮の修繕と、中高学校の水設備整備をもち、完了いたします。

みなさまからの温かいご支援に心より感謝いたします。



修繕された家屋

マレーシア発「家族の絆」を取り戻そう

子どもを産むことは許しても、育てることは許さなかったマレーシアのハンセン病療養所。出生後まもなく園外の親族や国内外に養子に出されました。高齢化が進む入所者の、一目でいいから我が子を見たいという思いと、実の親を探したいという第2世代の思いをつなげる取り組みが進んでいます。

スンゲイブローの子どもたち

英国植民地下最大であり、世界でもフィリピンのクリオン療養所に次いで2番目の規模であったマレーシアのスンゲイブロー療養所の入所者は、子どもを産むことは許されていましたが、育てることは許されていませんでした。誕生直後から所内の乳児院で育てられた子どもは6カ月になる前に園外の親族に、それが叶わない場合には国内外に養子に出され、時には宗教、言語、文化も異なる家族のもとで成長し、多くが結婚し、新しい家族と暮らしています。

高齢化が進む入所者の最大の願いは、出生後まもなく連れ去られた我が子との再会。近年になり、第2世代の中から、第3世代にあたる子どもも成人し、ひと段落したところで、実の親を探したいという人が出てくるようになりました。

私の親を探して

ノラエニさんは、生後半年でスンゲイブローから養子に 出された1人です。スルタンの運転手だった養父をはじ め、温かい家族に恵まれ、宮殿で過ごした少女時代は 幸福なものでした。自分が養子であることは知っていま したが、養父母への配慮から、実の親の所在は探しませ んでした。

手がかりが出てきたのは、養母の死の翌日でした。遺品から養子縁組の書類が出てきたのです。そこには、イスラム教徒として育てられた自分の実の両親は華僑であり、しかもスンゲイブロー療養所の住人である、という驚きの事実が記載されていました。

夫や子どもたちの全面的応援を受け、ノラエニさんの実の親探しの旅が始まりました。スンゲイブローの引き裂かれた親子の絆を取り戻すための活動をするイーニー・タンさんと出会い、療養所の記録、州で保管される誕生記録などさまざまな記録をたどった結果、自分には姉



家族の絆を取り戻す活動を続けるノラエニさん (中央右)、イーニー・タンさん (中央左)と、ノラエニさんの息子 (両端)

がいること、父はすでに退所していること、母はすでに 死亡していることが分かりました。姉と父の所在は、今 でも分かりません。イーニー・タンさんは、せめて母の 眠る墓を見せたいと、療養所の墓地で、母親の名前の 刻まれた墓を探し歩きました。ノラエニさんの母との再 会は墓前でしたが、その横には、ノラエニさんを信じ、 支えてくれる家族が立っていました。

あなたは 1 人ではない

ノラエニさんはイーニー・タンさんと書き上げた 「墓地で の再会」 についてこう語ります。

「この本にはハンセン病についての情報もありますが、 私たちはこの本を通して、親から引き離され、まだ親を 探す勇気のない第2世代に、こう伝えたいのです。『あ なたは捨てられたのではない。養子に出されたのは、愛 されていなかったからではなく、隔離政策のため。希望 を持って生きてほしい。あなたは1人ではない』」

親子の絆を修復するためには、親と子の双方の気持ち、 家族の理解と応援、そしてハンセン病に対する社会の理 解が必要です。

当財団は2013年度より、子どもに会いたい、親を探したいという気持ちをつなげながら、ドキュメンタリーフィルムの制作や、さまざまなイベント、ブログやフェイスブックなどを使い、第2世代、その家族、社会のハンセン病に対する考えを変えるための取り組みを支援しています。

[日本ボートレーサー奨学金]開始

ボートレースチャリティ基金による第4次の教育支援事業としてベトナム、フィリピン、インドネシア、ネパールで「日本ボートレーサー奨学金」を開始しました。

貧困・差別と偏見のため、ハンセン病回復者とその家族は、教育や就職の機会を奪われてきました。教育の機会を通じて、確かな未来へ向かって歩む力をつけるため、2002年度よりボートレーサーからのご寄付による教育支援を開始し、2013年度までに7カ国延べ5,204名の初等・中等・高等教育を支援しました。

本年度から、より確実な就職へと

結びつく高等教育(高等職業訓練を含む)にターゲットを絞った第4次教育支援を開始しました。。対象国はベトナム、フィリピン、インドネシア、ネパールの4カ国で4カ年計画です。

現地協力先より、すでに入学した奨学生からの熱い意気込みが伝えられています。「ハンセン病だから/ハンセン病の家族がいたから」できな



ベトナムの奨学生たち

かったことの壁が、一つずつなくなっていく日を目標に、今後も奨学生たちを見守ってゆきたいと思います。

第5回世界のハンセン病セミナー開催のお知らせ

第5回を迎える世界のハンセン病セミナーで、初めて南米を取り上げます。「コロンビア:旧ハンセン病コロニー "アグア・デ・ディオス" のこれから」 と題した本セミナーは、同市の歴史を振り返りながら、現状と将来の展望を語っていただきます。 みなさまのお越しを心よりお待ちしております!

アグア・デ・ディオスの歴史

1870年に近隣で湯治を続けていたハンセン病患者が、湯治場から追い立てられ、安住の地を求めてたどり着いたのが、アグア・デ・ディオスです。温泉が出るこの地名は、神の水という意味です。病院施設ができたのはそれから10年以上が過

ぎてからでしたが、アグア・デ・ディ オス療養所は、コロンビアで今も 残る2つの療養所の1つです。

セミナーでは

約 13,000 人が暮らす同市には、今でも回復者やその子孫たちが多く残っています。今回は現地で活動を続ける回復者主導の NGO コルソハ

ンセンの代表などに、アグア·デ·ディ オスの歴史と、そしてその将来の展 望を語っていただきます。

日時 2014年11月4日(火) 18:30~20:00

お申込みは smhf@tnfb.jp まで。

場所 日本財団ビル2階会議室



アグア・デ・ディオスの風景



療養所と一般社会を結ぶ唯一の吊り橋 「嘆きの橋」。患者たちはこの橋の前で 家族と別れ収容されました

「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業

本事業は第1期生17名を迎え、6月から2カ月にわたる集中講義で始まりました。経験豊富な看護師たちではありますが、地域在宅ケアに必要な「保健力」、健康評価に必要な「看護力」、センター企画運営の要である「事業力」、そして地域集団に根付くために必要な「行政社会力」を身に付けるため、ハードスケジュールにもかかわらず、目標へ向けて頑張っています。今後3カ月の実習を経て、いよいよ具体的な起業計画立案発表に向かいます。



日野原名誉会長による講義 「在宅看護の新しい役割」

今までの医師主導の医療ではなく、 看護師が、医療、介護を含むケア 全体を引っ張る看護を確立してくだ さいとエールをいただきました。



Project Cycle Management

「地域の人々が安心して暮らすことができない」という問題に対し、課題の発見、整理、分析を通して実行可能な具体策を考える過程を学びました。



高齢者体験

器具の装着などによって高齢者に 等しい全身負荷を体験しました。 ちょっとした介助によって安心した 生活が送れることを実感しました。



「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業 第2期生募集のご案内

受講期間: 2015 年 6 月 15 日~2016 年 1 月 29 日 募集人数: 30 名程度 受講料: 40 万円(税込) 応募受付期限: 第 1 回締切 2014 年 11 月 28 日

第2回締切 2015年1月30日

詳細は笹川記念保健協力財団のホームページで。

2015年度ホスピス緩和ケア事業 研究助成募集のお知らせ

ホスピス緩和ケアの向上を目的として、ホスピス緩和ケアに関する研究や、研修 (国内外) を下記の通り募集 いたします。

A ホスピス緩和ケアに関する研究助成 〈助成金額:上限 150 万円〉

複数の職種による先駆的・未来志向的な研究、在宅や地域における緩和ケアの研究を歓迎します。

B 奨学金支援〈助成金額:上限 200 万円〉

日本の緩和ケア領域における看護の質の向上のため、国内および海外の大学院(修士課程・博士課程)へ進学する 看護師を対象に支援を行います。(国内 100 万円/海外 200 万円)

□ ホスピス緩和ケアドクター研修助成 〈助成金額:700万円〉

ホスピス緩和ケア研修に実績のある全国各地の医療施設が実施する研修(1年間)に助成をします。

■詳細■ 詳細は、財団ホームページ https://system.smhf.or.jp/app/jp/ をご覧ください。

広募期間 2014年9月初旬~10月31日(金)

放射線災害医療サマーセミナー2014

8月18~23日の6日間、医学部・看護学部等の学生対象のセミナーを福島県立医科大学、長崎大学と共催しました。アメリカ1名を含む北海道から九州まで全国22名が参加、前半3日間は講義と演習、後半は南相馬市、川内村、福島第二原発でのフィールド実習を行い、福島に何が起こり、現在人々はどのような状況にあるのかを肌で感じる機会となりました。



修了式での記念撮影(於:福島県立医科大学)

災害対策は、発生前の防災mitigation /preparedness と、発生後の救援 relief からなります。耐震免震構造 や台風の警報は前者、地震発生後の破損建造物からの救出や救援センター設置は後者です。とはいえ、残念ながら、いかに対策を講じても被災ゼロを達成するのはとても困難です。なぜなら、ある災害について、ある時点で考えられる限りの対策を講じても、それを凌駕する規模や異なる災害が起こり得るからです。では、何をしてもダメかといえば、ただ一つ、どんな災害にも有益な方法があります。

それが人材育成です。

世界に同じ災害はふたつとありません。その意味では、私どもが経験する災害は常に次なる災害のケーススタディといえるほど、災害は多様です。現場経験が役に立たないという

ことではありません。日本の災害対策は世界に誇るレベルです。それは、経験を普遍化できる能力、ひとつの事例から多様な事態を想像できる人材、「人財」が沢山存在するからです。 災害対策は、未知の災害に立ち向かえる人材育成につきます。

今回の「放射線災害医療サマーセミナー」の参加者は、決して放射線災害だけに活躍の場を限定されることはないでしょう。柔軟かつ豪気、冷静だが優しく、科学的で人道的な22名の若者との一週間は、紆余曲折もあった準備期間中の苦労を完全に消し去りました。それぞれの分野の専門家の講義には学生らしい反応を示し、避難者健診や被災地域では真摯に人々の声を傾聴し、心を震わせ、原発の見学では科学的な質問も出されました。初めての企画でしたが、参加者の人生の

全過程中に、ひとつの鋲が打ち込まれた、そんな気がするお礼状を沢山いただきました。

福島県立医科大学、長崎大学、その他からの講師陣は申すまでもなく、ロジをご担当くださった福島県立医科大学関係者、現地見学を受け入れてくださった南相馬市、川内村、懇切丁寧な解説を含め見学を受け入れてくださった福島第二原発のみなさまに深く感謝いたします。

理事長 喜多悦子



なごやかなムードでの演習

笹川記念保健協力財団 事業紹介第3弾

FAPA 石館賞

当財団初代理事長の石館守三先生 (1901-96) は、東京大学初代薬学部学部長を務められた薬学博士で、1946年ハンセン病治療薬「プロミン」の合成に成功し、日本におけるハンセン病化学療法の父とも呼ばれています。石館先生のおかげで多くのハンセン病患者が救われましたが、その他にも強心剤「ビタカンファー注射液」や日本初のがん化学療法剤「ナイトロミン」の創製でも知られています。



初代理事長 石館守三先生



石館先生から財団に寄与された寄付金をもとに設立されたのが「FAPA 石館賞」です。アジアの薬剤師の職能や薬学の発展に功績のあった薬剤師・薬学研究者を対象に、2年に1度授与され、アジア薬剤師連合会 (FAPA: Federation of Asian Pharmaceutical Associations)で表彰式が行われます。

今年は10月にマレーシア・コタキナバルで、薬学教育、製薬企業、病院薬学および薬学研究に貢献した4名が表彰される予定です。受賞者には記念のメダルと賞金が贈られます。

受賞記念に贈られる石館先生のレリーフメダル。よく似ていますか?

マンスリーサポーターを募集しています

笹川記念保健協力財団では、さまざまなプロジェクトを安定的に進めていくために、マンスリーサポーター制度を立ち上げました。ぜひみなさまの月々のご支援をお願いいたします。クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただけます。

ご寄付いただく活動分野と金額をそれぞれお選びいただけます。

ハンセン病のない世界

ホスピス緩和ケア

公衆衛生の向上

クレジットカードで、毎月一定額を 自動的にご寄付いただけます 毎月 1.000円 每月 3,000 円 每月 5,000 円

*寄付金額の変更、停止はいつでも自由にできます。 当財団への寄付金は、税制上の優遇措置の対象となります。

詳しくは当財団のホームページ→ご支援ください→マンスリーサポーター (http://www.smhf.or.jp/) をご覧ください。

笹川記念保健協力財団では、さまざまなメディアで情報を発信しています。

- ホームページ/理事長ブログ/ハンセン病対策事業部ブログ/ホスピス緩和ケア事業部ブログ/公衆衛生向上のための事業部ブログURL: http://www.smhf.or.jp/ facebook: https://www.facebook.com/smhftokyo
- ニュースレター「チームささへるニュース」:年4回発行

チームささへるニュース Vol.5 2014年秋発行

発行元:公益財団法人 笹川記念保健協力財団

発行人:喜多悦子

編 集:チームささへるNL編集委員会

チームささへる事務局(笹川記念保健協力財団内)

〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階電 話:03-6229-5377 (代表) FAX:03-6229-5388

EMAIL:smhf@tnfb.jp URL:http://www.smhf.or.jp/

